



Vitus Berings eventyrlige opdagelse 1733-1743. København, 1948. (本学図書館所蔵)

後の研究で明らかになることですが、著者はロシア元老院へ文物や研究者の補充を依頼したことを述べており、この第2次探検は国政の最高機関が主導し、学者の参加を差配する科学アカデミー⁽¹⁾が実行に係わった国家的プロジェクトであったのです。

そこに、日本への到達が目標として記され、その順位がアラスカ探検より優先していることは、バルト海を制圧したことでスカンジナビア半島沖を北上して北極海域を通る航路の開発が論理的に可能となり、シベリアとアラスカ間に海峡が確実に存在すればこれを通過して、日本へ到達しようとしていたことを示しています。

■一命を以て亡きピョートル1世の夢を叶える

このように第2次探検隊の目的は、第1次のそれと比べて大きく広がっていました。著者は目的の達成状況について、「第1目標」即ち北方航路の開拓計画を、探検船が氷結に閉じ込められ多くの犠牲者を出したことを理由に目標の変更は余儀ないものとしています。「第2目標」の日本へ達する航路開発と日本・カムチャッカ間の地理的關係の調査は、指令官の一人であるマルティン・スパンベヤ⁽²⁾が分遣隊長となって日本へ向かい、多くの成果を挙げました。「第3目標」のカムチャッカからアメリカへの進航では、ベーリング自身が探検隊を率い、1741年6月からアリューシャン列島沿いに東進してアラスカへの上陸を果たしました。しかし、彼は帰帆中の同年12月に壊血病を患い、カムチャッカ半島に近い小島で亡くなりました。

この島は彼に因んでベーリング島と呼ばれ、またその北方はベーリング海、さらにシベリアとアラスカの間で存在を確認した海峡はベーリ

ング海峡と名付けられることになります。

隊長や多くの隊員を失ったこの第2次探検隊は、1743年に実質的な調査を終了しますが、第1目標で探検を断念せねばならなかった海域を除き、局地的な地図が作られて世界地図の発展の基礎となり、ここに亡きピョートルの夢が実現したのです。

■鎖国中の日本に上陸したスパンベヤ分遣隊

さて、前述のスパンベヤが率いる4隻の分遣隊が離散しながらも陸奥や安房の沖合に姿を現したのは1739年の夏のことです。日本の暦では元文四年で江戸時代の中期にあたり、鎖国の最中でした。しかし、驚くことに乗組員が上陸して、日本人と銭を交換したことが本書に書かれています。

これについて日本側の史料『通航一覽』には、「異船渡来して土人市右衛門に銀銭一を投ず(中略)また彼銭を長崎に廻され、蘭人に尋ねらるるに、魯西亜銭なるよし」と記されています。

また、本書はオホーツクに戻ったスパンベヤの日本観を「この国は容易ならぬ国であることを知った。彼は、よくもこの国を目ざして来たものと喜びにたえなかった(中略)その能力はあなどれない国民性をもっている(中略)日本こそ、やがて親交を結ぶべき国である」と叫んだなどと紹介しています。

この後、徳川幕府は急遽海防の強化令を出して結び始めた鎖国体制を修復しようとします。しかし、この時点で幕閣の誰一人として、ロシアが首都から日本へ至る直行航路を模索しており、この事件が同国の南下政策の端緒となることなどは知る由もなかったのです。

ちなみに、訳者の平林広人氏によれば、1758年頃に書かれていた本書の草稿は200年近くにわたり宮廷で秘められ、ロシア革命後の1938年に漸く世に出ることになったとのことでした。

主な参考文献と脚注

○S. ワクセル著 平林広人訳『ベーリングの大探検』(世界教養全集23) 平凡社 1962年。

(1) 大橋興一氏はその著『帝政ロシアのシベリア開発と東方進出過程』で、この探検が「学術的探検事業」であるとしてアカデミアや海軍省の関与を強調する。

(2) スパンベヤ(Martyn SHPANBERG)は、「シュパンベルグ」と呼ばれることが多いが、本稿では翻訳者の記載に従う。

おく まさよし (司書・事務長)